

## 平成 28 年度「世界青年の船」事業 参加青年異文化感受性発達調査

北海学園大学教授

石井 晴子

### はじめに

シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ（SWY29）日本参加青年を対象に、短い時間ではあったが、事前研修、および帰国後研修時に 下記に説明する異文化感受性発達モデルである、Intercultural Development Continuum（IDC）の考え方を説明し、IDI（Intercultural Development Inventory – 異文化感受性発達調査）（Hammer & Bennett, 2002）を行った。IDC 理論は、異文化の経験と認知トレーニングにより、人は「異文化」に対する認識を変えることができ、感受性が発達すれば、よりうまく多文化、多様性の環境に適応し、効果的に活動を行うことができるようになる、という、異文化に対する感受性の発達を説明するものである。ここで「異文化」というのは、人が心の中で「我々」と「彼ら」として区別することがあるグループ、カテゴリーすべてと考えることができ、必ずしも「日本人」対「外国人」というカテゴリーに留まらない。

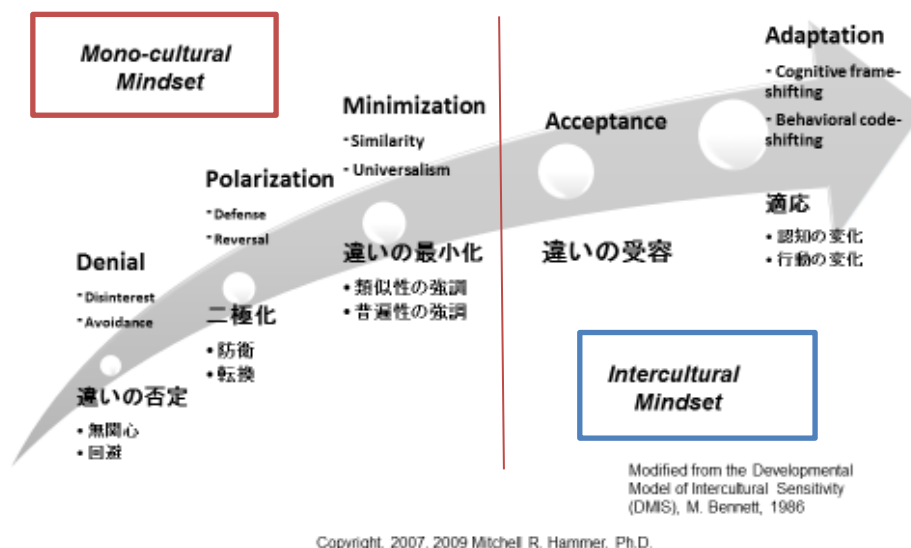
この報告書ではまず、1. 「異文化感受性発達モデル」とは何かを説明し、2. 今年の IDI の調査結果について考察する。そして最後に 3. なぜ、本事業に異文化感受性の発達が言及されるのか、本事業の特色をより生かすための提案を試みたい。

### 1. 異文化感受性発達モデル Intercultural Development Continuum（IDC）について

異文化適応の変化を見る基本となる理論であり、この報告書で分析する IDI 調査（Intercultural Development Inventory）の基本となるのが、Intercultural Development Continuum（IDC）である。IDC の考え方は、Milton Bennett（1993）の Development of Intercultural Sensitivity（DMIS）に基づいている。これはどんな文化にも優劣はなく、異文化の感受性が発達すれば、文化の違いを脅威とみなしたり、（単純で誤りの多い）ステレオタイプに陥ったりすることを減らせる。また、自分の文化的価値観を元にして他の文化を単純に「おかしい」と思うことを乗り越え、文化的他者の視点を理解し、様々な違いを受け入れることによって、自分も他の文化に適応することができるであろう、というものである。異文化コミュニケーション研究の多くの研究者が似たような異文化に関する世界観、あるいは、感受性の発達理論を展開してい

るが、ベネットの理論（DMIS）および、下記の IDC が最も研究、引用されている。具体的には、Fig. 1 のようになり、異文化に対する感受性を発達させることによって、左から右へ移行することができる、というものである。

Fig. 1 Intercultural Development Continuum (IDC)



IDC はステージと呼ばれる、段階的な世界観の変化を表す。のちに IDI のデータを説明するときにも使用する各ステージに用いられるキーフレーズを、データの説明で使う(1)~(13)として説明する。

### 1-1 Mono-cultural Mindset (Denial, Polarization & Minimization)

Fig.1 の左下から三つの Denial, Polarization, Minimization を Mono-cultural Mindset の領域という。これは、自分の文化的価値観からしか他の文化を見ることができない(自文化中心主義の)状態である。

最初の**(1) Denial**—違いの否定（無関心、あるいは回避）のステージにいる人は、文化差や異文化というのは表面的な食べ物、音楽、着るもの、と認識し、価値観のように内面的なものとは認めていない。このステージは二つのクラスター（Cluster）にわけられ、**(2) Disinterest cluster**、すなわち、他の文化の価値観に興味がない状態、および **(3) Avoidance cluster**、すなわち、表層的な「異文化」体験以外のことの接触を避けるという態度、がある。いくら海外旅行をしても、現地の人々に内在する文化の知恵や精神性、価値観を理解しようと思わなければ、本当の「異文化理解」は始まらない。海外旅行が好きな人で、このステージに留まる人も多い。

しかし、文化（考え方や価値観）を認識し始めると、多くの場合、人は自分のやり方との違いを感じはじめ、その差

を疎ましく思うかもしれない。考え方、やり方等の「異」文化に対する、疎ましさを、面倒くささ、ひいては敵対心をもつこのステージを Polarization のステージという。「海外参加青年が 時間を守らない」や「自分勝手な行動に出る」というのは、実は日本的価値観から見て、他者を判断しているわけで、自分がなぜ「時間を守る」ことが良いのか、時間を「守る」というのが一体どういうことなのか（何分遅れると「守らない」ことになるのか）、なぜ「勝手」と思うのか（なぜみんな一緒にやらなければいけないのか）を説明できるほど客観的に自分を理解していないことが多い。自分を客観的に見ることが出来なければ、相手の行動や考え方の理由もわからないし、わかろうとも思わないかもしれない。「普通こうでしょ」の普通を侵害されることによる苛立ちを覚えるのがこの次の Polarization と呼ばれるステージである。

この Polarization のステージで、「我々」対「彼ら」を比較し、「我々」のやり方は常に正しいと思う態度、敵対的な態度は、**(4) Defense** と呼ばれ、民族や宗教の対立はこの状態から発する。あの宗教は自分の宗教よりも劣っている、あるいはある民族は自分よりも頭が悪い、など、現代の地球上の抗争も「我々」対「彼ら」の対立である。反対に「彼ら」のやり方が自分の文化より優れて見えてしまうと、**(5) Reversal**—「転換」という状態になる。

この対立を和らげたい、という気持ちから起こるのが**(6) Minimization** である。みずから意識的に「違いを最小化」するのである。Defense の状態の人々が多く、文化間の抗争や対立が強い場合には、それを取りあえず解決するために、「我々」と「彼ら」との共通点に注目させ、平和をもたらすための異文化ワークショップが行われることもある。しかしながら、この Minimization のステージではあくまでも異文化感受性の発達としては通過点である。Transitional orientation と呼ばれる所以である。なぜならば、「人は結局みな同じだから、文化なんて関係ない」、とってしまうのである。人間の根本的要求（basic needs）を強調しすぎる**(7) Similarity Cluster**（類似性）や、人の価値観は基本的に一緒と思いこむ**(8) Universalism Cluster**（普遍性）は人の同質性の過大評価をしてしまう。しかしながら「人の価値観は基本的に一緒」というのは多くは自分の考え方と一緒に、であり、「自分の価値観と一緒に」な人を過大評価することは、「私の価値観が世界観の普遍的な価値観である」と信じることとなってしまう、価値観が違う人を結局は遠ざけてしまうことになる。確かに人は多くの共通した要素を持つので、そこを認識することは大切なことであるが、Minimization にとどまってしまうと、「普通～だから、普通の人は正しい」あるいは、「人間はみな、基本的に同じはず」という世界観を構築する。この世界観が固定してしまうと個人の個性や違いに興味を持つことを忘れ、さらには違いを紡ぐことはできない、という危険性をはらむのである。

Minimization は心地よく、「あの人は私の考え方と似ているからうまくやっていける」と安心する状態であるが、逆に複雑な文化的特性の違いを享受せず、どちらかという違いに対してまだ脅威を感じる事が多く、脅威が大きくなると、Polarization に戻ったりする。移行期のステージといわれる Minimization を含めてここまでの 3 つのステージが、Mono-Cultural Mindset、あるいは自文化中心主義、つまり自分の文化スタンダードから他の文化を評価する、という世界観である。

## 1-2 Intercultural mindset (Acceptance and Adaptation)

しかしながら、単に共通点ばかり探してはつまらない、あるいは異なった価値観を楽しみたい、お互いの違いを認め合いたい、となると次のステージに移行する。そのステージが**(9) Acceptance**—「違いの受容」のステージである。「文化に良いも悪いもない、ただ、違うだけである。私のやり方とは違うけれど、あなたのそういうやり方も受け入れよう」という考え方である。文化の違いをとらえる認知的複雑性が発達し、その上で取りあえずは他の文化的価値観に基づく考え方も尊重して受け入れてみよう、というのである。相手の立場に立ってものが考えられる。つまり、異なったやり方の理由がわかるのである。前述の「時間を守らない」という言い方ではなく、時間の概念がお互いに違うことがわかり、なぜ自分にとっては「遅い」と感じるのか、そしてそれは相手にとってはなぜ「遅くない」かの理由がわかる。「なるほど」と、まずは互いを accept (受容) する。必ずしも、相手のやり方に同意する必要はない。理由を理解し、そういう理由もあるのか、と受容することが大切なのである。互いの行為、感情の理由がわかって初めて、「それじゃ、どうしよう」という議論ができるのである。これが本当の異文化コミュニケーションである。

最後のステージは**(10) Adaptation** (適応) のステージである。適応のステージには二つのクラスターがある。一つは**(11) Cognitive Frame-shifting Cluster** (概念の転換) であり、相手の考え方で考えることができる、というものである。自分とは異なった相手の考え方の理由がわかり、その考え方、感じ方を自分のものにできる。**(12) Behavioral Code-shifting Cluster** は、相手のやり方を受け入れて、それじゃ、キミのやり方でやってみよう、となることである。やってみると意外と「なんだ、そういうことか。こういうやり方も悪くないな」と、相手のやり方も自分のものになることもある。これらが (10) Adaptation (適応) の領域となる。

この最後の二つのステージ、Acceptance と Adaptation は Intercultural Mindset と言われ、このステージの人は異文化適応ができ、他の文化でも「自分らしく」(つまり、「自分」の枠が広がるので、他の文化の価値観自体が「自分らしい」の中に取り込まれるのであるが) 仕事ができたりするのである。また、文化の懸け橋になることができ、日本に来て日本的なやり方にとまどっている外国人に文化の通訳 (彼らの文化的価値志向からの日本文化の解釈) ができる。IDC は以上がステージと言われるものである。ある土地に長く住んでいると、現地の「普通」が自分の「普通」になることがある。適応し、自分の価値観の一部になる。元々持っていた日本の文化的価値観を日本に帰ったときに思い出して、移住先の文化とどのように違うのか、2つの文化の間でどのように折り合いをつけるのかがわかると、bi(multi)-cultural な自己ができあがる。これが (10) Adaptation である。

最後に、**(13) Cultural Disengagement** (文化からのかい離) というものがある。これはステージには含まれない。前述の Acceptance や Adaptation のような理解は、自文化、及び異文化の価値観に対する客観的観察や自己の認知的複雑性を必要とするので、必ずしも容易なことではない。自文化と他文化のはざまで自己を見失うこともある。この場

合、**(13) Cultural Disengagement**（文化からのかい離）が見られ、自己の文化的特性も他の文化とのエンゲージメントもできなくなる。自分の文化的特性を良く理解せずに他のたくさんの文化との接触が長くなると、文化的価値志向のパターンを客観的に理解できず、どの文化からもかい離している気持ちになる。

ここで注意しておきたいのは、IDMの左から右に移行すれば「人として優秀である」とか、「感受性に秀でている」ということでは全くない。また、違いを受容しようとしても、人種差別のようなつらい経験をしたり、生活環境(衛生環境等)がどうしても受け入れられない、という経験をすると、なかなか違いを受け入れられない。また、ステージ、という表現をしたが（もともと Bennett が「ステージ」という表現をしていた）ゲームのように一つのステージを完全にクリアして次のステージに行く、というもでもない。さらに、**(6) Minimization** の基本的特徴は必ずしも悪いものだけではない。たとえば、子供のころは単純に「人に対して同じように接すること」が良いとされ、「共通の関心を見つけること」で友達ができる、と教えられている。しかし、その単純さが問題なのである。文化の複雑性、個人の中の多様性に関心が持てなくなると、結局、短絡的に「気の合ういつもの人」と「いつものやり方」で、に安住することになる。この安住には多様性の受け入れは難しい。

この IDC 理論を元にして作られたのが IDI（Intercultural Development Inventory – 異文化感受性発達調査）(Hammer & Bennett, 2002)である。